▼建築物探訪

巨匠への道

第四回　あけぼの子どもの森公園

室内にいると、外の寒さを忘れるような暖かさを感じる事が、しばしばある。サンドイッチと果物、そしてちょっとワインがあったら最高なのだが、それらがなくとも思い切って外に飛び出し、ピクニックをしたくなる衝動に駆られる。

今回は埼玉県飯能市にある「あけぼの子どもの森公園」をご紹介することにする。電車で行くと最寄り駅から少々歩き、車で行くと少々入口が分かりにくいという立地ではあるが、それはそれ。だからこその自然と静かさがある。

木漏れ日の眩しい散歩道は、なだらかな傾斜があるものの、さして気にはならない。少し歩くと、突然拓けた広場が現れ、きれいな芝生とロマンチックな建物が点在している。近年では洋菓子店や欧風料理店の建物にも同じ傾向が見られるが、この緑の大空間にあるメルヘンな建物の風情は、都会にあるそれらより、一層乙女心を掻き立てられること間違いなしである。

実はここ、ムーミンの世界観で造られた公園なのである。ムーミンとはご存じあのコビトカバのようなキャラで印象づけられている妖精で、フィンランド生まれの小説および漫画の主人公である。原作と日本のアニメではキャラクターの風貌と種類、また内容に多少の違いがあるようだが、未だに根強い人気があることは間違いないだろう。

ピクニックに最適 緑豊かなムーミンの世界

主な建物は、ムーミン屋敷、地元で採れたヒノキの長木を使った森の家（ムーミン資料館・図書室）や子ども劇場（プレイルーム）、そして、スナフキンが釣りをしていた橋である。

屋根に草が生い茂る、ムーミンの体型を彷彿させるキノコのようなムーミン屋敷に入ると、木の温もりが至る所にある。椅子、テーブル、階段など、全てが木製で、小部屋やちょっとした仕掛けがいくつもあり、心弾ませる建物になっている。家具はムーミンサイズで、大人が使うには少し小さく、丸い石造りの暖炉が部屋の中央にあり、童話好きにはたまらない。ちょっとはしゃいで小さな階段を上ってみたら、あっという間に階段は終わり、ただ暖炉の上に辿り着いてしまったりもする。また手すりは、ツタがモチーフとなっている鉄製で、曲線好きの心を掴まえる。開放的な吹抜け空間を中心に3階建らしい広く高い天井があり、周囲の壁に設置されている、らせん階段で上まで行けるようになっている。途中にはいくつもの小さな窓があり、外の自然に目を細めながら、迷路のような建物を散策することができる。

周囲には芝生が敷き詰められ、目に優しいのは必至の眩しいほどのグリーン。ここでピクニックをしたら、日頃のストレスも吹き飛ぶに違いないと思いながら、手ぶらで来てしまった事を残念に思った。

もうしばらくこの寒い冬を過ごせば、春になる。ある日突然、風が温かくなり、周りの景色に色味が増え、上着を邪魔に感じるその時には、大好きな食べ物持参で大好きな人達と、再度ここに訪れたいと願っている。

●スナフキンはミイの弟（？）らしいというのが、ムーミンファンの定説のようです。

文=和木 隆

群馬県生まれ。大学在学中に渡英。その間欧州を旅行し多くの古い建築物を訪れる。現在、都内にある建築施工会社に勤務。近日なぜか多忙で、建築巡りがままならないのが最近のストレス。

▼映画レビュー

えどがわはるみの 勝手にシネマ★レビュー

Vol.5「空気人形」

とても豊かな映画だった。生きるということ、死ぬということ。ビニール製の人形が、ある日突然「心」を持ち、人間に恋をする。他者と交わり、世界を知ることで空っぽなこころが満たされていく。そんな幸せな交歓を、空気人形と一緒に味わった。

登場するのは、空気人形を「恋人」として一緒に暮らす男（板尾創路）をはじめ、父子家庭の子ども、過食症のOL、一人暮らしの初老の婦人など、どこか孤独で空虚な人々。心の中にぽっかりと空いた空虚感を、人はいろいろなもので埋めている。「空っぽ」という点では人間も空気人形も同じ。空気人形は、レンタルビデオ店で働く純一（ARATA）に恋をして、持ってはいけない「心」を持ってしまう。無機質のビニール人形から、心を持った半人間へと変化していくペ・ドゥナの演技が、とにかく完璧だ。恋をして、突然世界に色が付く。ただただしくも不器用に世界に触れる様子が、たまらなく可愛らしかった。

目に焼きついて離れないシーンが、破れてしまった人形のビニールから空気が抜けるシーン。純一の手によって破れ目をセロテープで補修してもらい、体に息を吹き込まれる。好きな人の吐息によって満たされていく人形と、空気が抜けて「死」へと向かう空気人形の姿に惹かれる純一と。「生」と「死」に向かうイメージの違いに、男の人と女の人の、本質的な違いを見たような気がした。官能的なシーンだった。

撮影監督のリー・ピンビンの映像も素敵だ。青みがかった透明な東京の街を、きらきらした光で鮮やかに切り取っていく。物語は、「息」というものをメタファーにして、いろいろなものにつながっていく。映画の中で、ペ・ドゥナがある詩を朗読するのだが、これがまたすごくいい詩だったので紹介します。

生命は
自分自身で完結できないように
つくられているらしい
花も　めしべとおしべが揃っ
ているだけでは不充分で
虫や風が訪れて
めしべとおしべを仲立ちする
生命は
すべてそのなかに欠如を抱き
それを他者から満たしてもら
うのだ
世界は多分　他者の総和
しかし　互いに欠如を満たす
などとは
知りもせず　知らされもせず
ばらまかれている者同士　無
関心でいられる間柄
ときに　うとましく思えるこ
とさえも　許されている間柄
そのように　世界がゆるやか
に構成されているのは　なぜ？
花が咲いている　すぐ近くまで
虹の姿をした他者が　光りを
まとって飛んできている
私も　あるとき
誰かのための虻だったろう
あなたも　あるとき
私のための風だったかもしれ
ない

『生命は』　吉野弘

「空気人形」

監督：是枝裕和
出演：ペ・ドゥナ、板尾創路、ARATA、寺島進、オダギリジョー

レビュー度 ★★★★★

文=えどがわはるみ

えどがわはるみ●29歳おうし座B型。京都→大阪→東京と転々としながら09年群馬にカムバック。証券会社を経て投資顧問会社勤務。3度の食事よりも映画好き。好きな映画はバトリス・ルコント、キム・ギドク、故・市川準監督の映画全般。09年高崎映画祭は素晴らしかったです！